# 第Ⅲ部
# 個　人　原　稿

## 草香江と樋井川

佐伯桂一（城南校区在住）

福岡市に区制が敷かれてから、草香江小学校の校区の範囲は樋井川以東の中央区に限られるようになったが、私が通っていた昭和20年代の半ばには、現在の城南区の東北部もその範囲に含まれていた。鳥飼小学校や別府小学校、それに田島小学校もまだ無かったのである。古くから別府七丁目に住む級友は、「昔は草ヶ江本町やったけんね」と苦笑い。草ヶ江は、今では草香江と書くようになった。

福岡市博多区にある住吉神社に奉納された絵馬の「博多古図」（鎌倉時代に描かれたものを江戸時代に筆写したとされる）を見ると、中央の丘陵地帯（現在の福岡城址を中心に南北に伸びている）の東側に冷泉津、西側に草香江の二つの入海が描かれている。デフォルメされた絵馬ほどではなかったにせよ、草香江は大きな入江である。樋井川も当時はこの入江に直接流れこんでいたのであろう。

草香江の地名は古く万葉の昔にさかのぼる。万葉集巻四575に「草香江の　入江にあさるあし鶴の　あなたづたづし　友無しにして」の一首が見える。大宰帥(だざいのそち)大伴旅人(おおとものたびと)が任を終えて帰京した後、筑紫歌壇の歌仲間であった沙(さ)弥(みの)満誓(まんぜい)の送別の歌に応えて作った二首のうちの一つである。

しかし、ここで詠まれている草香江は大阪の生駒山麓にある地名とするのが定説のようである。岩波書店の日本文学体系『万葉集一』では、「草香江～大阪府枚岡市日下町、生駒山の西麓で昔は大きな入江があった」としているし、万葉学者澤瀉久孝氏も「万葉注釈　巻四」において同様の解釈をされている。もっとも、こちらは貝原益軒の『筑前国続風土記』の草香江に関する記事を紹介したうえで、作者の任地に近い地名として考えられなくもないかと若干の含みをもたせている。

私見ではこれらの説は１９８７年に現在の鴻臚館跡が発見される以前のものであった。鴻臚館と草香江の名残りである大濠公園との位置関係がはっきりしてきた現在では、もう少し踏み込んだ見方ができるように思われる。

最近の発掘成果により、昔は草香江の東端は福岡城の御高屋敷（現在のバラ園）の崖下まで迫っていたことが明らかとなった。旧平和台野球場跡で発見された鴻臚館の建物から草香江までは、徒歩でも10分とかからない。鴻臚館からは、ほど良い散策の距離にあるといってよい。

大伴旅人が鴻臚館（当時はまだ筑紫館と呼ばれていたであろう）を訪ずれた記録は無いようであるが、大宰帥（九州の長官）が大宰府の重要な出先機関である鴻臚館を任期中に一度も訪ねなかった方が不思議ともいえる。もし旅人が鴻臚館を訪ねたとき歌仲間の沙弥満誓も同道していたとしたら、宴のあと二人はつれだって眼下に草香江の穏やかな水面を眺める丘陵を散策したことであろう。

伊藤博氏はその著「万葉集訳注その二」（集英社文庫ヘリテージシリーズ）の中で、草香江は難波江の東端、生駒山の西麓にあったとしながらこの地名は博多湾西部にもあり、「相手の満誓に近いその海岸の映像を重ねることで、友を思う心を強調し、二人の心は一体であることを伝えようとした意図がここにはある」と述べておられる。旅人と同じように満誓もまた中央から派遣された役人であった。旅人も満誓もともに東と西の草香江を知っていたとすれば、この一首に込められた思いはより強いものになるのではないだろうか。

ところで草香江の本拠とされる日下について、これをクサカと読むのは大変難しいような気がするが、これについてかつて民俗学者の谷川健一氏が興味深い話をされたことを記憶している。氏によれば長谷（ハセ）、春日（カスガ）、飛鳥（アスカ）のような一見読みにくい地名はもともと、それぞれ泊瀬、滓鹿、明日香というような地名の枕詞的修字句であったものが、そのまま地名表記に使われるようになったものであるという。

長谷（ナガタニ）の泊瀬（ハツセ）
春日（ハルヒ）　の滓鹿（カスガ）
飛鳥（トブトリ）の明日香（アスカ）

それでは日下はどうか。谷川氏は、もともと草香という地名があり、それに日下（ヒノモト）のという枕詞的修辞句がついて、のちにそれがそのまま地名表記に使われるようになったといわれるのである。草香になぜ日下という修辞句がつけられるようになったのか、それは草香の地が太陽信仰の原点の地であったからだと。谷川氏によれば、のちにヒノモトノはヤマトの枕詞になった。草香は日本国の原点であったということになる。難波の草香江（津）を船出して筑紫に赴いた大宮人たちは、そこに故郷の海を思わせる大きな入江を見て、愛着をこめて草香江と名づけた。そのように考えることはできないだろうか。

話は変るが、毎年秋に福岡大学で開催される七隈史学会の研究発表会は発表テーマも地元に関するものが多く、私のような一般の歴史ファンも

気軽に参加できるので楽しみにしている。今年（平成24年度）は9月30日（日）の考古学の発表を聴講した。最初の発表は福岡大学の大学院生による「福岡平野周辺にみる開始期の灌漑水利」というテーマだった。堰のタイプとして越流堰と非越流堰の二種が紹介され、古代におけるその利用状況が説明されたのだったが、発表後一般参加の聴講者（仮にA氏とする）から質問が出た。城南区を流れる樋井川には、以前にウテミ川（越水川と書く）という別名があったが、これと越流堰との関係如何というものであった。弥生時代と江戸時代では余りに時代が離れすぎ若い発表者は答えに窮したようだが、小生が興味を覚えたのはA氏が次のように語ったことであった。調べてみると播磨地方に越水（ウテミ）という地名が残っている。播磨は福岡藩主となった黒田家の出身地である。そこで自分は越水川という名は黒田長政に従って、この地に移り住むようになった播磨出身の人々によってつけられた名でないかと思う・・・。

これを聴きながら私は樋井川の名そのものに思いを馳せていた。

随分以前のことだが、考古学者の森浩一氏があるTV番組で出雲平野を流れる八股大蛇伝説で有名な斐伊川は、その名が製鉄に由来するのではないかと語られたことがあった。
森氏によれば製鉄の原料となる砂鉄の採取には「カンナ流し」という方法がとられたが、これには大量の水が必要であり、その水を供給するために川の上流には多くの木製の樋が設置されていた。樋川の名の起こりであろうといわれたのであった。

奈良時代になって地名を好字二字に改めるよう詔が出され、木国が紀伊国となったように樋川も漢字一字をつけ足す形で斐伊川になったのか、伝説に出てくる大蛇の姿は鉄鉱炉の象徴であるというような話を聞きかじっていたのでこれは説得力のある説のように思われた。

この城南区歴史探訪講座で私たちを指導して下さっている福岡大学人文学部の桃崎祐輔教授（考古学）は、古墳時代に入って油山北麓の遺跡から山陰出雲系の土器の出土がみられるようになるが、これは山陰出雲の人々がこの地に移住してきたことを示しているといわれる。彼らは何故はるばる筑紫までやってきたのか。桃崎先生は、それは当時の貴重な金属資源であった鉄鋌などの鉄のインゴットを求めるためであったとされる。当時草香江に向かって開けたこの地は朝鮮半島との交易の拠点であり、鉄素材の輸入の窓口であった。

山陰の人々もこの地を経由せずに鉄を得ることは出来なかったのだ。

このような出雲と筑紫の人の交流を考えると、樋井川の名も先の越水川同様（こちらは播磨からではなく）出雲からもたらされたのではないかとふと思う。だが待てよ。製鉄のはじまりは出雲のほうが早かったのだろうか。むしろ、鉄の交易の中心地であった筑紫のこの地の方が製鉄技術の導入も早かったと考えるべきではないのか。私たちは今回の学習で、柏原遺跡における製鉄遺跡の発見や東油山地区における製鉄集団の痕跡について学んできた。「樋井川」（樋川）の名の流れは全く逆ではなかったのか？

## 城南区の道

菅間一公（七隈校区在住）

はじめに

伊能忠敬の大日本沿海輿地全図を、中村大学の体育館で数年前に見る機会がありました。見事なもので、明治時代になるまで使用されていたとのことでした。しかし、よく見ると沿海地域に比べ内陸部は空白で、例えば福岡市を見ると、博多湾沿岸と松平備前之守居城と博多から太宰府に続く道と、春吉、三宅、五ヶ山村と続く道、藤崎から南に伸びて三瀬峠に続く早良街道、しか画いてありませんでした。ただ、よく考えてみると、これは伊能隊が測量しながら歩いた道を示すもので当然の事でした。

その後「博多古図」と称されるものや「国絵図」を見ても大同小異で、博多を中心にして西は福岡城と海岸線に沿って伸び西新村が記載されて、時々姪浜村が描かれているものがあった程度でした。内陸部は地名の記入のある物もありましたが、夫々遊離してどのような道があったのか全く分かりませんでした。

明治時代になって陸軍測地部が地勢図を作り始め、明治 28 年の「輯製 20 万分 1 図」を基にした 2 万分の 1 図（明治 33 年発行）と、その後に地理院が定期的に改訂し発行される地勢図を比較しながら見ていくと町の発展や国土の移り変わりに興味が湧いてきました。特に昭和に入り、昭和 30 年頃になると住宅団地と道路が整備され、城南区（当時は西区）の様子は著しく変わっています。近頃では外環状道路が完成したばかりですが、環境の変化に驚くばかりです。

取り敢えず本稿では「城南区に関係する道」についての資料を集めてみました。

城南学園通り　　参照：インターネット
（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9F%8E%E5%8D%97%E5%AD%A6%E5%9C%92%E9%80%9A%E3%82%8A
2013 年 2 月 9 日確認）

福岡市城南区の国道 202 号中村大学前交差点から福大病院東口で県道 49 号線に接続する 3.2km の市道地行鳥飼七隈線の愛称です。城南区北部にある中村学園大学と同南部にある福岡大学を結ぶように位置しているため、2 つの「学園」を結ぶのが名の由来です。平成 17 年(2005)4 月に城南区の一般公募により決定し、平成 21 年(2009)に福岡市道路愛称として制定されました。起点の中村大学前交差点は中村学園大学の北東角にあり、終点の福大病院東口交差点は福岡大学陸上競技場の西側に接しています。全線にわたり片側 2 車線の 4 車線道路で、下を地下鉄七隈線が並走しています。

城南学園通り（七隈 4 丁目付近）

油山観光道路　　参照：インターネット
（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B2%B9%E5%B1%B1%E8%A6%B3%E5%85%89%E9%81%93%E8%B7%AF
2013 年 2 月 9 日確認）

油山観光道路は、福岡県福岡市中央区六本松にある六本松西交差点から城南区片江山展望台（油山）にかけて伸びる全長 6.9km の道路に付けられた福岡市道路の愛称です。平成 6 年（1994）、ユニバーシアード福岡大会開催記念としてこの愛称が付けられました。市街地から行楽スポットとなっている油山へ通じる道路であることがその由来となっています。

六本松～油山団地間は南北方向にまっすぐに延び、部分的に県道 557 号と合流しています。城南区南部の油山団地を抜けると油山の山道になり、終点の片江展望台で行き止まりです。昭和 37（1962）年 3 月に第 1 期工事が完了しました。公共交通としては六本松～油山団地間を西鉄バスの路線が通っていますが、これが沿道地域のほぼ唯一の公共交通手段となっていて、交通量の多い渋滞道路です

油山観光通り　東油山 2 丁目より北方向

油山通り

友泉亭から南に延び、東油山２丁目交差点で合流する県道 557 号の一部です。全長 1820m。

水道みち

大正９年(1920)に福岡市で最古の曲淵堰堤(まがりぶちえんてい)が完成。大正 12 年（1923）３月に平尾浄水場（註１）から初めて給水されるようになりました。この早良区の曲淵堰堤と中央区平尾浄水場を結ぶ導水管を埋めるためにできた道でした。

福岡市植物園の南側の小笹 5 丁目を南西方向に小笹交差点→小笹 2 丁目の交差点先で県道 555 号と右に分かれる→樋井川１丁目東交差点で大池通りを横切る→片江 1 丁目バス停付近で油山観光道路及び並行する旧道を横切る→西鉄片江営業所と南片江の間で外環状線を横切る→油山の山麓の西片江、梅林１丁目の住宅街を抜ける→早良区の梅林６丁目と７丁目を分けて早良妙見口へと一直線でつながって、国道 263 号と重なって曲淵ダムに繋がっています。

(註１)　昭和 51 年(1976)夫婦石浄水場開場により閉鎖し現在植物園。

太閤道（たいこうみち）　：参考文献　『別府郷土史研究第１集』、及び牛島英俊「太閤道伝説を歩く」

文禄・慶長の朝鮮出兵の豊臣秀吉が、肥前の名護屋へ通った道で「太閤道」と呼ばれています。九州小倉に上陸した秀吉が赤間、箱崎、博多から赤坂を通り、六本松を経由し別府、原、今宿、唐津、名護屋と向かいました。

別府郷土史研究によれば、太閤道は別府橋の西側、別府１丁目の安藤病院前から別府２丁目と３丁目の間を通り、中村大学の北側に抜けて、別府５丁目と６丁目の間の道―あさひ幼稚園、弓の馬場、城南中学前を通り、逢坂(おうさか)を登って、原へ。原から姪浜、生の松原、今宿、唐津へと通じていたものです。現在でも長垂に太閤水（註２）と称して、水汲み場があります。街道の昔の姿を残している場所も所々にあるようです。

また、六本松から姪浜間は室町時代菊池武時も通った道といわれ、戦いに敗れた武時の首は六本松の首塚に、七隈の菊池神社の地には胴体を埋めたと伝えられています。

(註２)　長垂の太閤水は「続風土記」「続風土記付録」では「薬水」と呼ばれていましたが、明治 33 年の二万分の一地図では「太閤水」と明記されています。

太閤道（城南中学校北側「逢坂」付近）

別府橋通り　　：『別府郷土史研究第１集』から一部引用

国道 202 号のうち、中央区赤坂３丁目交差点から城南区荒江交差点までの区間で延長 2．9km。福岡市の北部を通る国道 202 号のバイパスとして昭和 45 年に完成しました。開通当時は「今宿バイパス」と呼ばれていました。1979（昭和 54）年 10 月の市制施行 90 周年記念で「別府橋通り」の愛称が決定しました。「樋井川にかかる別府橋を通っていること」が名称の理由です。

この道の起源は太閤道で、明治 40 年に県道の建設が計画されました。現在の中村大学の所は丘陵地帯でしたが、その丘陵を切り崩し、線路を敷いてトロッコ汽車で土砂を運んで市役所方面の埋め立てに利用し、六本松から荒江・原に通じる道幅３間半（７ｍ）の道路が作られたものです。その工事のための線路敷設に際しては、一面の田圃で一軒の立退きもなかったとのことです。太閤道と中央区赤坂３丁目から別府２丁目別府交番の手前までが重なります。

大正 13 年(1924)北九州鉄道が開通して、鳥飼駅ができると、この道路に踏切ができました。昭和 12 年（1937）国鉄となる頃からトラックの交通量も多くなり、踏切による渋滞は目に余るものになってきました。鳥飼の電車通りが馬車の通行禁止となって、この道路が市中で交通量の一番多い場所となっていました。地元では「別府の橋」と呼ばれ、昭和 10 年の頃にコンクリート橋になるまでは土橋で、欄干もなく、橋の上の両側には草が生えていました。道幅は３間(5.4m)位で、馬車が通る時は揺れていたそうです。

終戦前には橋の両側に家が建てこんできて、賑やかになりました。この県道(原―東警固線)は早良郡方面の村々から福岡市中への交通の要所でしたので、野芥方面から花を満載したリヤカーや農家の肥汲車(馬車)が朝は 3～4 時頃からｶﾞﾗｶﾞﾗと木炭を積んだ車力や馬車が続いて、狭い道路は

賑わったそうでした。

昭和 27 年(1952)4 月から西鉄バスが西新から荒江四ツ角を廻ってこの道を通り、国体道路経由で博多駅に1時間に1便ぐらいで運行をはじめました。昭和 35 年 4 月に西鉄の飯倉営業所ができて、バスの運行回数も多くなり、更に混雑がひどくなり道路拡張の話が持ち上がるようになりました。

昭和 39 年(1964)から県道の拡張工事にとりかかり、昭和 44 年(1969)9 月に別府橋が架け替えられました。幅 25m、取付部分も含めて工費 6 千万円でした。交通信号も取り付けられたのですが返って交通渋滞となるなど混乱し、樋井川方面からの車の渋滞も大変なものでした。筑肥線をまたぐ立体交差の別府大橋の工事も着手されていましたが、立ち退き世帯が 135 世帯にもおよび交渉に手間取ってなかなか進まず、昭和 45 年(1970)年 7 月 30 日 6 年の時間を要し、工事費 2 億 6 千万円で開通しました。延長 420m　幅 20－40m へと以前の 3 倍以上に拡げられて、1 日 1 万 3 千台の通行をさばけるようになりました。それ以前は 1 日 54 回の踏切のストップに泣かされていたことは夢物語となりました。しかし昭和 46 年に国道 202 号バイパスと命名された頃からまた、渋滞が始まり、昭和 49(1974)年春に「動くセンターライン」方式（註 3）を九州で初めて導入しました。別府大橋～中村大学間の 1km（その後原四ツ角まで延長）を朝の 6 時～10 時は上り 3 車線下り 1 車線とし都心に向う朝の通勤の混雑を緩和しました。しかし、昭和 53 年のバス運行は 1 日 536 便　1 時間平均 60 台のバス運行があり早くも狭く感じるようになっています。平成 17 年地下鉄七隈線の完成後はバスや自家用車も少し減り、朝夕の通勤時間帯にバス専用レーンを設ける対策が講じられています。

（註 3）「動くセンターライン」方式は平成 9 年(1997)に福岡市営地下鉄 3 号線（愛称：七隈線）の工事開始に伴い幕を閉じました。

別府橋通り（別府大橋）

福大道路（ふくだいどうろ）

福大通りは、福岡県福岡市城南区の片江 1 丁目交差点から干隈三差路交差点まで東西に繋がる市道清水干隈線 2.6km に付けられた福岡市道路愛称です。昭和 56 年に干隈～島廻り橋間が完成し、平成元年市制 100 周年の時に正式に命名されました。福岡大学のキャンパス北側を通り、城南学園通り、早良街道などの南北の幹線道路を連絡しています。東には大池通り、その先にはきよみ通りに連絡しており、福岡空港国際線ターミナルから続く東西道路の西端に位置しており交通量の多い道路です。この道路ができるまでの旧道が片江天神社の北側を走る道でした。

福大道路（松山中央公園前）

板屋道（いたやみち）

西新エルモール（旧西新岩田屋）の南にある旧唐津街道（西新旧通り）と西新歓楽街の入り口とが交差する地点の南に向かう道の左手に「菊池道」という道標があります。そこを起点に、曙 2 丁目信号→ツルカメ薬局→太閤道と交差する逢坂→西南の杜湖畔公園西口信号→干隈中央公園の右側→りんどう保育園→櫛田神社→縁切り地蔵→重留新町信号→サニー駐車場横→北キツネ店舗ウラ→福岡市立入部保育所→松ヶ根の水→福岡市水道局埋設管の地の前→仙道橋→馬頭観音→谷口バス停→板屋→坂本峠→佐賀へというルートです。

このルートは江戸時代及び明治時代の産業にとって重要な道路でした。道沿いには祖原炭坑、鳥飼炭坑、七隈原、干隈遺跡群、梅林古墳、櫛田神社、縁切り地蔵、村下古墳、林遠里（はやしえんり）の勧農社、正覚寺跡、茶臼城趾、拝塚（はいづか）古墳、兎道岳城趾、松ヶ根の水、荒平城趾、主基斎田跡および栄西茶碑などの史跡名勝があります。

早良街道（さわらかいどう）

板屋道に平行してその西側の平地を貫く脇山口と内野を結ぶ道路の内、脇山口交差点から荒江交差点までの福岡市道西新荒江線、および、国道263号のうち荒江交差点から野芥交差点までの区間です。延長4.5km。大正8年に起工し大正10年に完成しました。さらに1928(昭和3)年の内野での主基斎田行事に合わせ野芥～内野間が延長され、現在の国道263号線の一部となりました。

1979（昭和54）年の福岡市制施行90周年記念で脇山口～野芥間が「早良街道」の愛称が決められました。昭和39年に拡幅改良工事が完成しています。

住宅や商店などが建ち並ぶ街中を北行2車線・南行1,2車線が通り、城南郵便局を左手に見て野芥口交差点で福岡外環状道路と交差、野芥交差点では県道49号線と交差しています。

野芥口から野芥方面

県道49号線　：（大野城二丈線）

明治33年陸軍陸地測量図2万分の1の地図にも記録された道筋であり、恐らく江戸時代またはそれより昔の糸島と太宰府を結ぶ主要道路であったと考えられます。昭和34年拡幅工事が完了しています。

現在の城南区域では城南区の南部をカーブしながら東西に延びて、堤二丁目交差点から南片江交差点の間は福岡外環状道路と重複し、都市高速5号線の真下を通ります。それ以外の城南区内全域でも都市高速5号線・福岡外環状道路と並行しています。

南片江交差点で福岡外環状道路と分かれ、福岡大学と福岡大学病院の南側を通り、早良区との区境を西進して野芥交差点から早良区に入ります。

福岡都市高速5号線　：福岡高速環状線の南半分
参照：インターネット（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6%8F%E5%B2%A1%E9%AB%98%E9%80%9F5%E5%8F%B7%E7%B7%9A 2013年2月9日確認）

城南区の（堤⇔野芥）間3.1kmは平成20年4月19日に開通しました。野芥－堤－月隈が繋がり、福岡空港まで21分(37分短縮）、太宰府インターまで15分(42分短縮）で行ける様になりました。総事業費は434億円でした。西方向の早良区部分（野芥⇔福重4.1km）は平成23年2月26日に開通し　西九州自動車道と繋がりました。総事業費は、569億円でした。これにより自動車専用の「福岡都市高速5号線」が完成しました。

平成24年7月21日に福重JC渡り橋工事(900m)が完成し自動車専用道路1号線と繋がり、1号線、2号線の夫々一部と環状に結ぶ自動車専用道路が完成し「福岡高速環状線」と命名されました。

平成外環通り

福岡都市高速　5　号線(月隈～福重)の下を走る一般道路(４車線)は計画策定から38年後の平成23年　4　月　29　日に博多区立花寺(りゅうげじ)から西区拾六町間16.2km　が完成しました。井尻の西鉄大牟田線とJR　鹿児島線の下を潜る立体交差の完工をもって終了しました。城南区には福岡大学の施設の下を潜る福大トンネルもあります。平成24年6月公募された名称から「平成外環通り」が選ばれました。　平成２４年８月９日に行われた表彰式では、命名者の髙田文夫（城南区）さんの受賞の喜びを歌った短歌が披露されました。「我が町の　ほこれる道を　夢に見て　未来へ続く　外環通り」

都市高速道路５号線(上)と平成外環通り(下)
堤２丁目交差点西

| (付)交通関係年表 | |
|---|---|
| 1889(明治 22) 年 12/11 | 博多駅開業　九州鉄道の博多－千歳川開通 |
| 1890(明治 23) 年 1 月 | 博多桟橋（長さ 364m　幅 7.2m）が民営で完成 |
| 1899(明治 32) 年 7/13 | 博多港開港 |
| 1904(明治 37) 年 1/1 | 博多湾鉄道の西戸崎－須恵開通 |
| 1904(明治 37) 年 5/15 | 九州鉄道の博多－笹栗開通 |
| 1904(明治 37) 年 5/21 | 東中島橋，石堂橋の渡り初め式 |
| 1905(明治 38) 年 5/20 | 室見川改修工事完工式（着工は明治 32 年 10 月） |
| 1909(明治 42) 年 | 2 代目博多駅が落成 |
| 1910(明治 43) 年 | 福博電軌（市内電車）営業開始　大学前－西公園，呉服町－博多駅 |
| 1921(大正 10) 年 | 西新－入部道路完成（国道 263 号線の一部分） |
| 1924(大正 13) 年 | 九州鉄道　福岡－久留米開通(現西鉄天神大牟田線) |
| 1925(大正 14) 年 6/15 | 北九州鉄道鳥飼―東唐津間開通 |
| 1927(昭和 2) 年 | 城南線（市内電車）開通 |
| 1930(昭和 5) 年 | 名島飛行場完成 |
| 1936(昭和 11) 年 | 福岡第一飛行場(雁ノ巣国際飛行場)が開場 |
| 1937(昭和 12) 年 | 国鉄筑肥線　営業開始：北九州鉄道の博多－伊万里間を買収 |
| | (s58-3/22 地下鉄開通に伴い廃止) |
| 1959(昭和 34) 年 4 月 | 別府橋通り：原～東警固線(旧国道 202 号)開通 |
| 4 月 | 県道 49 号線「深江～大野城線」拡幅工事完了 |
| 1962(昭和 37) 年 3 月 | 油山観光道路　第 1 期工事完了 |
| 1963(昭和 38) 年 | 3 代目博多駅が開業 |
| 1964(昭和 39) 年 | 早良街道(国道 263 号)荒江～唐木道路 12m に拡幅 |
| 1972(昭和 47) 年 | 板付飛行場が米軍から返還され，福岡空港が発足 |
| 1975(昭和 50) 年 | 西鉄市内電車廃止 |
| 1975(昭和 50) 年 | 山陽新幹線　岡山－博多開通 |
| 1981(昭和 56) 年 1 月 | 島廻り橋～干隈が開通し：清水～干隈完成 |
| 1989(市制 100 周年) | 島廻り橋－干隈を「福大通り」で愛称登録 |
| 1981(昭和 56) 年 | 福岡市営地下鉄 1 号線　天神―室見開通 |
| 1983(昭和 58) 年 | 国鉄筑肥線廃止され鳥飼駅が無くなる |
| 1984(昭和 59) 年 | 地下鉄 2 号線呉服町－馬出九大病院開通 |
| 1986(昭和 61) 年 10 月 | 島廻り橋～下堤が開通「油山観光道路」：六本松～東油山 |
| 1986(昭和 61) 年 7/24 | 三瀬トンネル開通　普通車通行料￥250 |
| 1993(平成 5) 年 | 中央埠頭に博多港国際ターミナル開業 |
| 1994(平成 6) 年 | 七隈本町道路の幅７ｍを２５ｍに拡幅始まる |
| 1994(平成 6) 年 | アイランドシティの工事着工 |
| 2005(平成 17) 年 2/3 | 地下鉄 3 号線「七隈線」南天神－橋本　営業開始 |
| 2005(平成 17) 年 4 月 | 鳥飼－七隈線のうち別府中村大学から七隈福大学間の愛称公募し |
| | 「城南学園通り」に決定　(2009 年福岡市道路愛称名に登録される) |
| 2006(平成 18) 年 3/21 | 東背振トンネル有料道路開通　普通車通行料￥300 |
| 2006(平成 18) 年 3/26 | 国道 202 号線ﾊﾞｲﾊﾟｽ　福重－堤開通(福大トンネル完成) |
| | 都市高速 5 号線　　堤－月隈も同時開通：変則環状道路完成 |
| 2008(平成 20) 年 4/19 | 都市環状高速 5 号線　野芥－堤開通：野芥より空港まで 21 分 |
| 2008(平成 20) 年 8/12 | 三瀬ループ橋開通　　トンネルも含む通行料　普通車￥300 |
| 2011(平成 23) 年 2/26 | 都市高速 5 号線野芥－福重 4.1km 開通により完成 |
| 2011(平成 23) 年 3/12 | 九州新幹線　福岡－八代開通し鹿児島まで繋がる |
| 2012(平成 24) 年 7/21 | 福岡都市環状自動車専用道路完成 |
| 2012(平成 24) 年 10/31 | 「福大病院―西鉄大橋」間西鉄バス 700 系統正式運行開始 |

## 城南区歴史講座に参加して
菅間一公（七隈校区在住）

平成24年度の前半分は桃﨑先生による講座で、時代ごとの福岡の移り変わりゆく様子を知る事が出来て大変興味が持てました。この地域も石器時代から何世代も人が入れ替わって人間の営みが行われた痕跡があり、その延長線上に私達が今生活していることを改めて確認しました。

後半は亀﨑先生の講座で、現在の環境の中で行われている伝統行事が、その地域の事情に合わせて変化しながら長い年月受け継がれているのを知る事が出来ました。また我々の周囲にあって、見過ごされていた石碑等にそれを建てた人々の想い（感謝）と願い（祈願）や優しさ（慰霊）を垣間見る事が出来たと思います。

私がこの講座に参加した理由は「昔の城南区を知りたかった」という単純なものなのですが、この講座を通じて「歴史の始まるのが今の瞬間」ということを強く感じるようになりました。500年前 1000 年前が歴史と感じていた私にとっては、なんでもない5年前の災害、10年前の出来事が私達の孫たちの世代にとっては弥生時代や江戸時代の出来事と同じ扱いとなって歴史上の出来事として捉えられるからです。しかし孫たちに正確に伝えることが難しいのは経験済みです。21世紀初頭に生きる今の私たちの生活を写真や録音、文字で記録する事が将来の世代が、より正確な歴史を探る基礎史料（資料）となるのでしょう。

「歴史のおもしろさ」は謎解きがあるからだとおもいます。事実を知って「何故･･･何故･･･」と理解し納得してゆく過程にロマンがあります。また過去を知ることにより未来への進路の手掛かりとなります。今後も城南区や福岡市の歴史をもっと広く、そして深めていくと同時に地域の方々にも「地域の歴史」知って頂くような事を、これからライフワークとしていきたいと思います。

最後になりましたがお二人の先生の専門的な話や指導を受ける事が出来た事に感謝致します。また講座や調査の段階で城南区の多くの方々と交流が出来て、今年度は大変満足している事を申し添えて、サポートして頂いた生涯学習推進課の皆様に深く感謝申し上げます。

## 田島、七隈散策・・・・かつての浅海を偲ぶ

中野勝之（福岡大学工学部　教授）

早良郡志に、「祖原のうちには浅海が広がり・・・・」とあるように、樋井川の東岸に現在も地名が残る草香江から南や西に向けて荒江、田島、片江、島廻橋などの地が浅い海の中にあったとされている。入り江は城南区の全域に広がっており、田島が浮かんでいたという。

島廻橋から福大方面を見ると確かにゆっくりした登り勾配がわかる。また、友丘3丁目から福大方面も上り勾配が明瞭で、かつての渚であった地域が想像できる。梅林から福岡大学、さらに友泉亭あたりまでを散策してみると、起伏に富んだ地形であることがわかる。非常に複雑であるため簡単に地域の高度差を実感できないが、昭和30年頃に販売されていた地図によると、精度は良くないが地域の高度を知ることができる。10m と20m の等高線を辿るとこの辺りの様子がおぼろげながら分かり、古代に海が入っていた状況が彷彿としてくる。海面が最も高かったとされる縄文前期には、おそらく福岡大学キャンパスの中央部と金山は島として浅海に浮かんでいたのではないかと想像できる。福岡大学周辺に多くの池が残されたのはこの海進の故と考えられる。やがて、油山の鉄を含んだ赤土（粘土質）が豪雨等でこの周辺の海に流れ込み（田島沿革史：1867、慶応三年の豪雨で東油山の数か所が崩壊し、堤防を越えて水が流れ込んだ）、さらに土砂は樋井川や油山川に運ばれて、浅海は埋め立てられ、金山や福岡大学の丘陵周辺は低地になり（現状で海抜10m）、逃げ切れなかった海水は閉じ込められて多くの池になったと推定される（図1）。10m と20m の等高線の間にある池はこの名残と考えた。この長いスパンにわたる埋め立ては茶山や田島を産み出した（図2）。この過程で広い土地や島が自然の力によって造成され現在のような景観ができあがったのではないかと推察した。時間とともに、田島、茶山、金山、福大キャンパスの丘陵は繋がり、かつての島を分けるあたりには大きな池が散在しており（池巡りコースが設定されている）、島の形状等も地図上から読み取れる。

埋め立てられた地域は油山と繋がり、10m の等高線より低い部分が海の後退期に浅海として残されたのではないか。古文書にある「草香江の南は海入しており、友泉亭の付近で大きく分かれてさらに深く入る」と言われるのは長尾辺りの浅海の地形を言っているのではないか、すなわち長く尾を引く湾入を表現した地名が長尾ではないかと思われる。東岸は小笹、笹丘から鴻巣山に繋がり、西側は上述の田島、金山に挟まれた地域であり、南には油山が堂々と尾根を張る見事な景観であったと想像される。この低地に油山に源流をもつ樋井川がいまも流れている（昔、この辺りでは田島川と呼ばれていた。田島より上流が樋井川と呼ばれた）。

こうして大山祇のなせる技で造成された風光も人間活動の活性化に伴い急速に変化して行く。この姿を写真で追跡しよう。次頁の写真が昭和24年から昭和52年の間の空から見た七隈の風景である。弓掛池を初めいくつかの池は既に姿を消し、自然豊かであった小袖池もありきたりのため池に変わり、西の堤池も小さくなって姿を変えた。

参考資料

1）福岡大学上空からの写真
（福岡大学大学史資料室提供）
2）現代語版田島沿革史発行委員会編1996『現代語版田島沿革史』福岡市大字田島財産区、初版（『田島沿革史』）1897年。
3）福岡県早良郡役所編1973『早良郡志』名著出版、初版1923年。

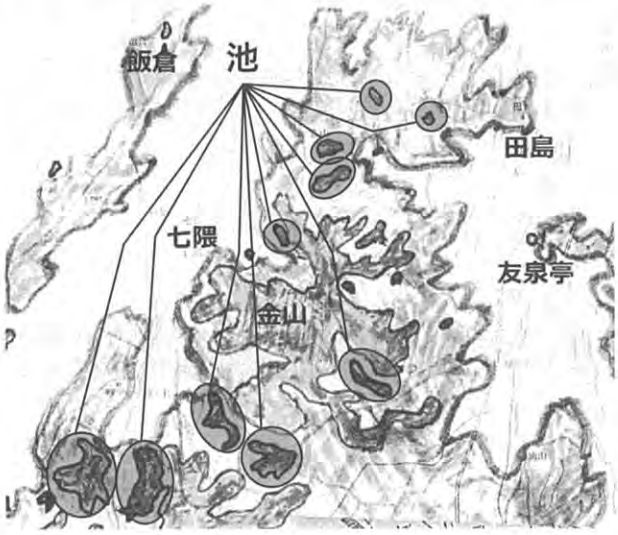


図1　1960年頃の七隈・田島付近の地図
（海抜 10m と 20m の等高線を引いたもの）
地図のカラー版をウェブ上に示す。
http://fusus21.exblog.jp

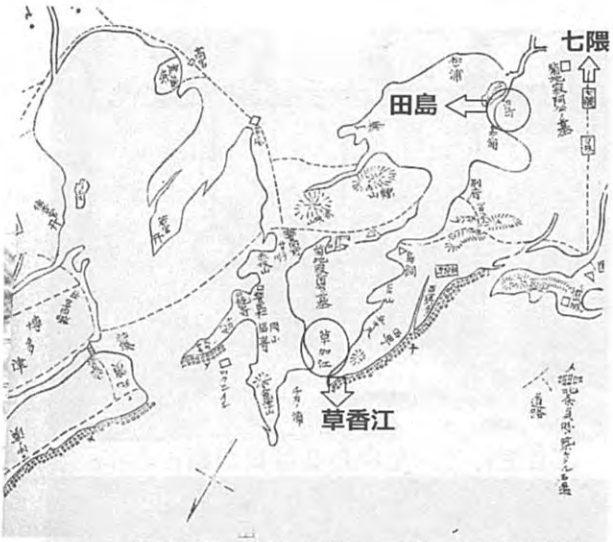


図２　古地図に見る七隈・田島（下が海側）
（1332 年、元弘年間の地形：1897 年、田島村の山田定祥秘蔵）

航空写真（福岡大学大学史資料室提供）
（福岡大学、および七隈の移り変わり）

①昭和 24 年福岡商科大学七隈校地

②昭和 38 年福岡大学七隈校地

③昭和 44 年福岡大学七隈校地

④昭和 48 年福岡大学七隈校地

⑤昭和 52 年福岡大学七隈校地

## 副田虎王一さんへのインタビュー
桑原昌子（南片江校区在住）

郷土史研究家　副田虎王一（そえだ　こおういち）さんについて

【副田さんの略歴】
・大正 10 年生まれ、早良郡樋井川村大字下長尾字本村（現在長尾４丁目）に現在も居住。
・長尾尋常高等小学校卒業
・福岡市立男子師範学校付属小学校高等科卒業
・福岡県立福岡工業学校本科採鉱科卒業
・福岡県田川郡添田町大峰（おおみね）炭鉱入社
・広島県呉海軍潜水学校卒業

【現在の活動】
・華道真生流
・筑紫女学園生花嘱託
・郷土史研究家として講演（150回）
・朝３時半から長尾小学校の通学路の清掃

平成 24 年 12 月 10 日　城南区歴史探訪講座のメンバー4 名でご自宅へ伺いお話をお聞きしました。

お話しは大峰炭鉱での生活、韓国の方々との、生花交流の話。海軍での話しは昭和 16 年から昭和 20 年 8 月終戦まで、特に潜水艦「伊184号」で出撃するも、本部命令で下艦、その後まもなく撃沈され 96 人全員戦死されたこと、星空を見上げると戦友と会話出来る気がすると話してくださいました。

平成 25 年 1 月 21 日再度ご自宅へ伺い、樋井川の民話についてお聞きしました。福岡市の他区には民話が残されているのに城南区には昔話しの記録がないので現在は故人の城戸善雄（油山）、上原守人（片江）船越国雄（田島）、副田敏生（長尾）、篠隈正秋（樋井川）の各氏から聞いた昔話しと自分自身が 50 年から 60 年前から聞いた昔話しの端々をメモしたのを調べ、この土地に根ざした民話を掘り起こし空白の部分は以前華道教室の暇な時に歩き廻り調べていた郷土史を加えて創作して、伝承の表現をそのまま使って「樋井川の民話」が出来たそうです。

20 年程前から書き始められ、短いのは 1 日で出来たそうです。最初の作品は「浚（さら）えずの池」、内容は油山の七不思議です。

「樋井川の民話①～⑥」31 話になっています。

※早良郡樋井川村とは柏原、桧原、油山、片江、上長尾、下長尾、堤、田島の８集落となっていましたが昭和３年４月１日から福岡市になりました。

ご自宅にて。左から２番目が副田さん。

副田さんの描かれた絵葉書

## 城南区歴史探訪講座に参加して
桑原昌子（南片江校区在住）

自分が住んでいる城南区について何も知らないので何か　‥‥　と思っていたので講座を受講しました。

今までは女性ばかりでする研修会に参加していましたが、今回は男性を交えて、地域の歴史の事を勉強されている方も多く何も知らない自分が恥ずかしく、ただ講座に参加する状態でした。一つ一つ聞きながら写真の撮影方法からはじまり「歴史について」「モニュメントについて」等、今まで通り過ぎていたのに気になり始め、足を止めて観察するようになりました。

色んな人に質問したり、深く聞く事が多くなり地域の事が以前とは違って歴史が少しは解ってきました。メンバーの人達といろんな場所を探索に出掛け、話し合い、歴史探訪について、同じ時間を過ごせたことに感謝します。

城南区内の公民館での「郷土史講座」を受講すると、歴史講座のメンバー5～6 名の方と一緒になります。これからも教えていただきながら続けて行きたいと思います。

考古　桃﨑祐輔（福岡大学人文学部教授）
民俗　亀﨑敦司（九州大学　大学院）
両先生ありがとうございました。

## 城南区歴史探訪講座に参加して
紫垣義憲（片江校区在住）

城南区に移り住んで20数年、この地の成り立ち等気に留める事もなく暮らしていた。そんな折、平成23年の5月「城南区歴史探訪講座」の案内を知った。

城南市民センターの会場で頂いた資料には「先人達が生きる中で築き、守り伝えて来た遺跡・史跡‥‥数多くの歴史遺産が残っています。この貴重な遺産を掘り起こし‥‥楽しい学びあいの場にしませんかと」とあった。

掘り起こす知識はないが、学ぶ事は出来るのではと思ったのが継続参加の動機となった。

平成23年度の1年目福岡大学の先生や市の関係職員の方々から毎回分厚い資料の配布を受けて講座に出席した。

講座の内容は考古学の先生から城南区の時代別概観として、

- 旧石器時代の城南区
- 縄文時代の城南区
- 弥生時代の城南区
- 古墳時代の城南区
- 奈良、平安時代の油山山麓
- 鎌倉、室町期の油山山麓から黒田藩の支配

などを対象として、考古学上の観点からの論考等を学んだ。

一方、民俗学の先生からは

- 北部九州の宗教民俗について
- 城南区内に今なお受け継がれている宗教行事、民俗芸能等

について学び、また実際の現場で見学する機会を得ることができた。例えば、2月は正覚寺の粥占い、海神社の粥占い、7月の東油山の提灯とぼし、7月の田島神楽等である。

同時に城南区の考古資料や民族資料、地史に関する参考文献等も多数紹介頂いた。毎回の講座は堅い頭にはなかなか記憶に残らず、専門用語が理解できない事が多かったが、天気に恵まれた春や秋の1日を利用してフィールドに出て、福岡大学内や阿蘇神社内の碑分の拓本とりの実習は良い経験ばかりでなく気分転換にもなった。

2年目を迎えた平成24年度は学習の継続として考古学分野では平成23年度以降の先生の新たな研究の成果等を紹介頂いた。

民俗学の分野では城南区内の民俗概観を把握するための調査の方法、そのまとめ方等を学んだ。10月から11月にかけて講座参加者が二つのグループに分かれて町歩きと称して、ある時はグループで、ある時は一人で城南区内を探索した。探索にあたっては事前に資料で把握している場所は比較的探すのは容易であったが、日頃何となく気になっていた場所を重点に当ても無く歩き廻った結果、小祠、石塔、石碑、お堂等が数多く発見され、思いの他の喜びとなった。

これら見過ごしてきた小祠、石塔、石碑、お堂等は長い年月を風雨にさらされ、そこに何が記されているか不明のものが多くあり何を我々後世の人びとに伝えようとしたのであろうかと思ったものだ。

「城南区歴史探訪講座」への参加動機は単純なものであったが、この2年間に城南区を学び町歩きした成果は自分達が住み慣れた地域の歴史の発見であり奥深さでもあつた。本講座をきっかけとしてこの街の歴史の奥深さを更に学び続けたいと思う。

## 歴史探訪講座に参加して
渡 久恵（堤校区在住）

講座に参加して、城南区には、縄文・弥生時代からの遺跡が数多くあることを知りました。油山に源流がある樋井川や支流の駄ヶ原川、一本松川、片江川、七隈川などの流域には、京ノ隈古墳、神松寺御陵古墳、樋井川遺跡群、宝台遺跡、東油山遺跡、片江遺跡等々があり、青銅器、鉄器の発見から、その時代より中国、朝鮮から伝わっていたこと、そして海岸線が今よりずいぶん内陸にあったことなどを知りました。

桃﨑先生、亀﨑先生より数多くの資料をいただいて教わり、またグループで探訪した事で、実物を観察できたこと。先人たちの自然に対する畏敬の念、感謝の気持ちが神社での行事や、庚申さまをお祀りしたり、粥占をしたりして、地域の人々の生活を豊かにする為に、風習、伝承事が大事に守られ受け継がれていることを学びました。

地域の行事、史跡、橋の名、道や地名にもいわれや物語りがあり、歴史を感じることができました。当時の人々の暮らしや様子が偲ばれるとともに、縄文・弥生時代から受け継がれてきた精神性を感じ、自然を大事にしながら自然と共生できる道を歩んできたのだと思いました。これからもそうあってほしいと思います。

桃﨑先生、亀﨑先生のもと、実際に教わった事がなにより一番の思い出となり、有意義な二年間でした。ありがとうございました。

片江風致公園にて歌碑の調査中の様子

## この講座で学んだこと
山﨑博教（堤ヶ丘校区在住）

今まで歴史はあまり関心がありませんでしたが、今回参加して講師の先生、同好の皆さんの知らない話、もの、ところ、歴史に関しての考え方が大変参考になりました。

天皇、磐井の乱、白村江の戦い、2回の元寇襲来、源平合戦、鎮西探題の話、菊池の戦い、関ヶ原の戦いといった歴史を学びました。また、歴史の背後の民衆の生活と暮らし、日本古来の宗教と渡来した宗教や考え方、信仰とその定着、暮らしの変遷を学びました。さらに、天明や享保の飢饉で生活が一変したこと、人に階級があること、支配者の成り立ちなどを、講師の先生や探訪会の同好の方々、神社などの関係者の方に聞きました。このあとも、古地図、写真、資料を参考に、私の探訪を始めたいと思います。

樋井川町会館内の庚申尊

阿蘇神社で調査中の様子

## 金山校区の池・堤とモニュメント
### 宮本いつ子（金山校区在住）

城南区は油山の裾、山襞にあり平地の少ない丘陵地です。私の町はその名前の通り金山。歩いた地域は近辺の茶山、友丘、別府と神松寺の一部と最も襞に該当する地域でした。ここは恐らく昔は耕作地にするには水に不自由な土地柄ではなかったと思われます。

それは池・堤の多さに表れています。この地域の中に大きな池は四つ、その後ではないかと思われる窪んだ公園が二つ数えられました（区内 27 箇所）。新しい町だからでしょうか、公園もその大きな池を含み二十四箇所もあります。

また地蔵堂も個人所有を含んで永浦地蔵・内観地蔵・森地蔵・深澤地蔵（不動様合祀）と四箇所あり古より地域の安泰、家族の安寧の願いをこめて祀られています。先人の温かい思いと、畏れを感じさせられました。

【片江校区のモニュメント】
区画整理事業碑：神松寺北公園
表面　区画整理事業完成記念植樹　　桜十本
裏面　昭和六十一年三月
片江地区　土地企画整理組合

【金山校区の地蔵尊】
永浦地蔵尊：ぼけ封じ、病封じ
伝承によると、永浦池は昔茶山より友泉亭への一本道の中間にあり、木々が鬱蒼と繁る藪であった。無礼討ちの遺棄、姥捨て、自殺者が多く鎮魂のため地蔵を祀る。

次に池公園の特徴です。

【金山校区の池公園】
①大牟田池　周囲 450m　治水池
春は桜、夏水連（白）、秋どんぐり、冬は柊南天の黄色と甘い香。鴨の子育て。今年は一組が十二羽孵して皆で楽しんでいましたが、烏の子育てと　重なり残念でした。亀多数。百匹近くいるのでは。甲羅干しをしているのを数えました。牛蛙がなきます。
②堤ヶ浦池　周囲 370m　洪水調整池
春はつくし、さくらんぼ、夏水連（黄）、秋彼岸花・大銀杏、冬水仙。銀杏は雌銀杏なので、大風の後銀杏拾いに行きます。
③永浦池　周囲 500m
春は緑色の桜御衣黄、夏水連（赤・白）、秋栗、冬南京櫨の実が美しい。大きな鯉がいて、人の足音で寄ってくる。昔よりいわれのある池。東側にぼけ封じの永浦地蔵があります。
④鳥飼池　周囲２００m　洪水調整池
あひる、バンがいる。春は桜・藤、夏チンシ梅、秋蒲・葦

それぞれに花種、生物に趣があるように整備されています。担当地域をくまなく歩いてみて、アップダウンの差が大きい所でしたが、きれいに整備された町と言うのが印象でした。また公園の周囲は近在の方たちのウォーキングポイントになっており、池めぐりコースもあります。

## 城南区歴史探訪講座に参加して
### 松本美重子（七隈校区在住）

「邪馬台国は何処なのか？」という興味から始まり、福岡市埋蔵文化センターの歴史講座、七隈公民館での歴史講座に出席し、地域の郷土誌編集にも関わる機会を頂きました。平成二十三年度・城南区歴史探訪講座、第１回・６月４日からの開講に出席し、区内にある多くの古墳群等、長く地域に住んでいながら知らない事が多いのに気づかされました。

城南市民センターで桃﨑祐輔福岡大学人文学部教授の豊富な内容の講義にも、学生時代に戻った思いで、都合がつく時は参加しました。福岡大学のキャンパス内の記念碑や阿蘇神社の石碑からの拓本とりも、初めて体験できました。画仙紙を石碑に当て霧吹きで石になじませて、タンポで拓墨が一度に強く付きすぎないように、何度もそっと押し当てて皆と協力しながら作業し、鮮明に石碑の文字が浮かび上がった時は感動しました。

出席者全員で神社等に足を運び、鳥居・本殿・手洗い鉢・社務所・石碑など、境内の配置を詳しく調べて写真を撮り、回を重ねて記録した物を整理する段階になり、思うようにまとまらず、果たして自分に出来るのか不安も有りましたが、皆さんと教室で整理をしていくうちに、微力ながら参加しているのだと思えるようになりました。

亀﨑敦司先生から神社や文学碑・モニュメント等を見る際の記録する要領も教えていただき、今までただ訪ねていただけの場所が新鮮に思えてきて、気づきもしなかった庚申塔や五穀塔など、多くの事柄を確認する事が出来ました。桃﨑先生と暑い夏の日に、田島神社の神楽を見たのも楽しい思い出の一つです。二年間、貴重な体験をさせて頂きました。講義に際して日程の連絡や資料の準備など、色々と支えて下さった城南区役所生涯学習推進課の職員の方々にも感謝致します。

## 油山の海（わだつみ）神社

熊丸博英（早良区梅林在住）

油山には海の神様が２か所祀ってあります。東油山と西油山のそれぞれの海神社です。東油山海神社は城南区東油山にある油山観音正覚寺の背後に位置します。西油山海神社は早良区西油山に在る西油山中央公園から少し山に入った所に位置します。祭神は、志賀三神【底津綿津見神(そこつわたつみのかみ)・仲津綿津見神(なかつわたつみのかみ)・表津綿津見神(うはつわたつみのかみ)の三柱(綿津見三神)】を祀っています。

東油山海神社では、今も東油山地域の宮座(神仏の祀りを行う組織)で神事を守り継がれています。二月一日の「粥試し」では正覚寺境内で粥占いが行われています。小正月の一月十五日に小豆を入れた米を炊き保管、この日にカビの生え方や量などで農作物の作況を占う行事です。「粥開き」とも呼んでいます。

十月二十二日の「注連縄おろし」は、風雨にさらされ古くなった注連縄を降ろし、新しい注連縄に替える神事です。宮座の主だった方が集まり新しい注連縄に飾り換えた後、神棚にお供え物を上げ神主さんのお祓いを受けます。神事終了後、行事当番の組(当と呼ぶ)当主の家へ集まり、次の当(組)へ引き継がれます。

また四月上旬の「春ごもり」、九月上旬の「秋ごもり」と宮座の人たちで神事が受け継がれています。

海神の総本社である志賀島の「志賀海神社」は“龍の都”とたたえられ、海の守護神として篤く信仰されています。東油山海神社は、江戸時代は龍樹(りゅうじゅ)権現社と称していたそうです。海神社と龍は関係が深そうです。

また、権現は神仏習合の神号。となれば、油山の二つの海神社も昔盛んだった油山仏教の泉福寺、天福寺と関わりがありそうです。

志賀海神社の社殿は南に向って（博多湾方向）祀ってあります。一方、東油山神社・西油山神社は境内近くから志賀島が見渡すことができますが、東油山海神社の社殿は東に向って（宝満山方向)、西油山海神社の社殿は西に向って(飯盛山方向）祀っています。只の立地条件で社殿の向きが決まったのか、何か謂れがあってその様な方向に社殿が建てられたのか興味引かれるところです。

何故、油山に海神が二つも祀ってあるのか？　油山中腹に或る海神社は、その昔航海の目標物だったのか？　志賀海神社とはどの様な繋がりが？泉福寺・天福時との関わりはあったのか？　　興味が尽きぬ海神社です。

参考文献：福岡市史『福の民』、福岡教育委員会 文化財部「志賀島神社」、早良郡役所「早良郡誌」、

東油山の海神社（2012.10.16 筆者撮影）

## 城南区歴史探訪講座に参加しての感想

大久保 實（みのる）（南区長住在住）

モニュメント調査での私の担当区は、神松寺の一部と長尾四丁目と五丁目の一部を受けもち、天気に恵まれた平成 24 年 11 月 11 日と 12 日、２日がかりで自転車を使用して調査を行った。

その際私用の地図を持出しながら調査を行い、寺社、小祠、記念碑は余り見当たらず住宅街、マンション、宅地、福大通り、大池通りに面した商店街、銀行、飲食店等全く調査に関係ない神松寺、長尾地域に自転車を止めてはその都度歩いて調べてみた。時間的に余裕もあったので、長尾変電所近くの樋井川添いに北に出向き、長尾教員住宅、下長尾東公園を見てまわり、ゼンリン住宅地図の「長尾三」で枠が切れた所で西に向かい、長尾小南側にある下長尾八幡宮に出くわした時は私にとって非常に嬉しかった。

入口附近に案内板があったが、カメラを持っていなかったので、その看板の内容（案内版の字句）を記録しながら、境内を見て廻った。平日でもあり、人影一人見当たらず、八幡宮は午後の為西陽もあたり、小春日和のなごやかな一日が流れていた。

その翌日午後の日差しを受け、自転車で念の為に時間をかけあちこち見て廻った所でこの二日間は私にとって、感慨深い思い出に残る勉強になった。

城南区歴史探訪講座を企画された城南区役所生涯学習推進課の職員の方並びに亀﨑先生、桃﨑先生方、どうもありがとうございました。

三尾池公園（ツクシオオガヤツリ植生地）を調査中の様子

**城南区歴史探訪講座に参加して**
**内村敬二（南片江校区在住）**

講座を受講したのは、平成23年度城南市民カレッジのまちづくりふれあい専科であった。6月から7月までの予定で、7回の講座で開講式から始まり、城南区が他区に比べたら史跡など歴史的な案内のボランティア団体等が無いので、それらの資料作りや史跡等の勉強で少しでも城南区のことが、吸収出来たらと思い参加した。福岡大学の桃﨑先生・白川先生、それから遠い柳川からオートバイに乗って、現場に同行いただきながら指導いただいた亀﨑先生、講義の中でこんなにも城南区に古墳が多いこと知り、地域行事等を勉強することができた。しかしながら、城南区の古墳は梅林古墳を除きほとんどが、住宅開発がなされて、標識すらないのが現状であり、ほとんどの人が知らないのでないかと思う。それに比べて、例えば西区は史跡が多く古墳、標識等も整備整理されているのが多くあり、地域性かと考える。

桃﨑先生からは出土品等の膨大な資料をいただき、自分としてはファイル化して整理しているつもりであるが、残念ながらそれだけになって終わっている。講義が終わりいよいよ、校区ごとにグループに別れて活動をするようになり、グループ研究の進め方等話合いで進めて来たが、受講者が少なくなって来た。また、阿蘇神社に出かけて、拓本を採りの実習、御子神社の宮司の話を伺い、神社の調査等を行なった。

各校区で発行してある、郷土史研究書などの事例報告の資料などを調べたり聞いたりした。
そして、グループの研究、個人研究等が進まないので、これからの進め方、何でもいいので、研究レポート提出とどんなことを調べたいかと話し合いをした。

先生達は忙しい中で、予定を調整されて講座を開催されたが、平成23年度講座は終了した。
平成24年度は区役所の組織がかわったが、城南区の歴史遺産を掘り起こしこれからの、歴史を活かしたまちづくりを進めることで、歴史探訪講座は継続することになるとの区役所から報告があった。講座も最初は30人ぐらい受講者がいたと思うが、現在10人ぐらいになった。講義を聞きながらと亀﨑先生の指導で、各校区をゼンリンの地図で分担して、神社、史跡、モニュメント等、気になる物を手分けし、写真撮りの現地調査を実施した。

また、何人かでいっしょに回り、自転車でゼンリンの地図を見ながら、史跡、モニュメント等の写真と位置確認（住所）調査した。

校区ごとの調査結果の説明文と写真入りが出来上がると単なる調査資料としてだけなく、今ある推奨ウォーキングコースと同じように、参考資料として見学する人が多くなるのではないのかと思うと楽しみである。

また、ボランティアも必要になるのではないかと思い、その時は勉強して、そのひとりになれたらと思います。

自宅の庭に来たメジロ

# あとがき

福岡大学と城南区との連携事業によるこの城南区歴史探訪講座では、福岡市のほぼ中央に位置する城南区に関わる考古学や人類学の分野での近年の研究成果を、広く市民へと還元することを念頭に始められました。それと同時に、受講者自らが城南区のことについて調べ、その成果を刊行物上にて報告するという点が一般的な市民講座にはないこの講座の特徴でした。このうち、後者についてはそのあらましを第Ⅱ部の序にて記しましたが、ここではまず、そこに書き残したモニュメント調査の「楽しさ」について書き留めておきたいと思います。

今回の調査では、城南区のモニュメントの分布と現状を記録に留めるという目標を掲げ、受講者と一緒に汗を流して路地を歩きました。この作業は、一定の時間と労力を要するものでしたが、調査に携わった13名の受講者にとっては実に和気あいあいとしていて楽しかったという印象を持っているように思います。その楽しさをありのままに言葉で伝えるのは少々難しいですが、集約すれば以下の3点になるように考えられます。まず1点目は、モニュメント調査には、九州で広く使われる言葉で言うところの「さるく」（＝出歩く、歩き回る）楽しさがあることです。モニュメントを探して町歩きを行ったのは秋口の気候が非常によいときでしたし、普段通ることのない路地裏を思い思いに会話しながら、ぞろぞろと連れ立って回るのはそれだけで楽しいものでした。また、歩くのに疲れたら途中で寄り道して休憩してみる気楽さも、ここでの楽しさの一つのように思います。次に2点目は、「調べる」楽しさがあることです。これには、見つけた石造物の文字を読んだり、お堂や祠を世話する人に話を聞いたりすることが挙げられます。さらに、モニュメントの写真を撮ったり、場所を地図上にチェックしたりして、整理していく作業もここに入れてよいかと思います。調べていくうちに、離れた場所にある石造物の形状の類似や同じ年号の刻印などにふと気づくことがあり、こうした点は「調べる」楽しさの醍醐味に数えられるでしょう。3点目は、「話す」楽しさです。おしゃべりしながら町歩きを行ったり、調べものでの思わぬ発見を共有したりするのは、他の受講者がいるからこそだと言えます。また、第Ⅱ部の序でも少し触れましたが、城南区や近隣地域に暮らしてきた受講者たちにとっては、モニュメントやそれが所在する場所にお互いに重なりあう記憶があります。子どものころまだ何も建っていなかった福大の構内を遊び場にしていた話や、独身のころにデートをした場所など、そこでの記憶は町歩きの際や、ミーティングを兼ねた報告会で誰かの発話を通じて表れ、他の受講者を巻き込んで会話に発展していきました。こうした出来事も、「話す」楽しさとして入れてよいかと思います。以上の3点は、資料性を追求することとは少し異なりますが、モニュメント調査がもつ独特の魅力としてここに記しておきます。

さて、今回の講座は多くの方々の支えによって進めることができました。まず、モニュ

メント調査時の受講者の方々の活躍について伝えておきます。調査に加わった13名の受講者は、若年層でも60代前半と比較的年齢層の高い人々であり、講師にとっては倍以上も歳の離れた方々でした。それにも関わらず、こちらの言うことをしっかりと聞いてくださり、非常に手間ひまのかかるモニュメント調査に付き合っていただきました。また、その姿勢は「したがった」というものではなく、常に積極的なものでした。例えば、町歩きの全体調査では、モニュメントの所在地を回る際の案内役としての役割を買って出てくれた方々がいました。案内役は、あるときは七隈校区で、またあるときは片江校区でといった具合に、その地区に詳しい人がかわりがわりに務め、集団を引っ張って行ってくれました。さらに道案内だけではなく、行く先々のお堂や祠の世話人の方と面識がある場合には、由緒等の話が聞けるようにコーディネーター役ともなってくれました。ほかにも、昼休憩や打合せの場として普段使っている公民館の会議室の手配をしてくれた方がいたり、また調査を深めるために自らが調べた情報を提供してくださる方がいたりと、まさにそこに長年暮らしてきたことによる知恵をフル活用して、助けてもらったように思います。この本は、こうした受講者の活躍がなければできなかったことをここに記しておきます。

次に、城南区生涯学習推進課の皆様には、本講座への全面的なバックアップをしていただきました。2年間におよぶ講座の際の準備やモニュメント調査末期の各方面への確認作業など、多くの点でご尽力をいただきました。同様に、講座の主会場となった城南市民センター職員の皆様にもお力添えをいただきました。また、調査の初期段階では、城南区内の公民館の館長様や主事様にも、貴重な情報提供をしていただきました。さらに、本書を刊行するにあたり、出版社の三栄印刷様にはこちらの要望に沿っていただいたり、適切なアドバイスをいただいたりするなどしました。そして、本調査で訪ねた先々の城南区にお住まいの皆様には、お堂や祠の建立の由緒や謂れ、お世話の様子や管理の仕方などを丁寧に教えていただきました。とてもすべての方々を記すことはできませんが、本講座でお世話になった一人一人の方々に厚く御礼を申し上げます。

城南区は地下鉄七隈線の開通や都市高速（5号線）の全線開通に代表されるように、ますます姿を変えていく途中にあります。こうした動きにあわせるように、モニュメントも現在のままではなく、別の場所へ動いたり、なくなったりすることさえあるかもしれません。本書が町歩きの手引きとして現在に暮らす人々に有益に活用されることを願う一方、将来的にも地域の記憶を留めたアーカイブとして振り返られることを期待してやみません。

表紙の説明

市営団地（片江住宅2棟）から南西方向を眺めた様子。手前には西の堤池の湖面が広がり、左奥には油山、さらにその向こうには背振山地が見渡せる。中央右には福岡大学の建物がそびえるが、その最右方には2012年に完成した新図書館が確認できる。中央左方（表紙裏）には、都市高速5号線の高架橋も見出すことができる。

－「城南区歴史探訪講座」報告書－

# 城南区の歴史散策

平成25年3月発行

編　者　城南区歴史探訪講座「城南区の歴史散策」編集委員会
発行元　福岡市城南区役所 生涯学習推進課
〒814-0192　福岡市城南区鳥飼六丁目1-1
TEL 092（833）4043（直通）
FAX 092（833）4045
印刷所　三栄印刷株式会社
〒812-0044　福岡市博多区千代1-6-1
TEL 092（631）3336